

# 「特別の教科 道徳」における小学生用教科書 — 動物愛護の視点からの検討 —

渡辺典子\*

Elementary School Textbook of Morality as Special Subject:  
A Study in Terms of Prevention of Cruelty to Animals

Noriko Watanabe

## はじめに

## (1)

本稿では、2018（平成30）年度から新しく実施された「特別の教科 道徳」の小学生用教科書を対象に、イヌとネコを扱う教材を取り上げ、その内容について検討することを目的とする。筆者は、教職の非常勤講師である一方、本号51号、52号に執筆したNPO法人「自然と動物を考える市民会議」事務局員でもあり<sup>(1)</sup>、動物愛護に関わっている立場、教員を育てる立場、そしてジェンダー平等を追求する立場から、教材を多面的に考察できる立場にある。それらの立場を生かし、本稿では、教育現場の先生たちが教材研究を多面的に行う手助けとなるよう、率直な考察を行っていきたい。

「特別の教科 道徳」（以下、道徳とする）では、これまでのような登場人物の心情の読み取りだけではなく、問題解決や体験的な学習なども取り入れ、考え、議論することをめざしている。それらを決められた授業時間内で行うことはとても大変であると、現場の先生方から聞く。しかしその大変なことを行うために必要な教材研究に割くための時間はとても短いという。良く知られているように教育現場が多忙なためである。そのような状況のため、研究者や退職した教員たちが現場の教員による教材研究をカバーし、子どもの成長を応援するような関わりがこれまでになく求められていると言えよう。

## (2)

対象とする小学生用道徳教科書は8社から出版されており、それらのすべてにイヌとネコの話がある（擬人化したものは除く）。以下、教科書名、作品名、徳目、対象動物の順に記す。

○学研教育みらい『みんなのどうとく 3年』<sup>(2)</sup>

…「目の見えない犬」（生命の尊さ）・イヌ

○学校図書『かがやけ みらい しょうがっこうどうとく1ねん よみもの』<sup>(3)</sup>

…「たった一つのいのち かがやけいのち—小さないのちのものがたり—」（生命の尊さ）・イヌ

○学校図書『かがやけ みらい 小学校どうとく2ねん よみもの』<sup>(4)</sup>

…「ねこがわらった時」（正直、誠実）・ネコ

…読み物コラム「山古志村のマリ」（生命の尊さ）・イヌ

○教育出版『小学どうとく はばたこう明日へ4』<sup>(5)</sup>

…ほじゅう教材「動物たちの命を守る—熊本市動物愛護センターのちょう戦—」（生命の尊さ）・イヌとネコ

○廣済堂あかつき『みんなで考え、話し合う 小学生のどうとく2』<sup>(6)</sup>

…「ねこが わらった」（正直、誠実）・ネコ

○光文書院『しょうがくどうとく ゆたかな ころ 1ねん』<sup>(7)</sup>

…「うちのねこ」（自然愛護）・ネコ

○光文書院『小学 どうとく ゆたかな ころ 2ねん』<sup>(8)</sup>

\* 新制40回生 博士課程後期満期退学 武蔵野美術大学・群馬県立女子大学他非常勤講師

…ふろく「ねこが わらった」（正直、誠実）・ネコ

○東京書籍『新しいどうとく 4』<sup>(9)</sup>

…「ボロといっしょ」（思いやりの心）・イヌ

○東京書籍『新しい道徳 6』<sup>(10)</sup>

…「命の重さはみな同じ」（かけがえのない生命）・ネコ

○日本文教出版『小学道徳 生きる力 6』<sup>(11)</sup>

…「[ダン]をどうする？」（相互理解、寛容）・イヌ

○光村図書『どうとく 4 きみがいちばんひかるとき』<sup>(12)</sup>

…「生き物と機械」（命の不思議さ）・イヌ

上記の中で、3社に共通している話が、「ねこがわらった」/「ねこがわらった時」で、対象学年は2年生、（正直、誠実）を学ぶ教材である。これに続いて2社が掲載しているのが、目の見えないダンという名のイヌの話。3年生では（生命の尊さ）について、6年生では（相互理解、寛容）について学ぶ教材とされている。

多様な価値観を認め合う道徳教材の中に、なぜ同じ話が複数回掲載され、学年も学ぶべき徳目も同じとなるのかというと、文科省推奨の読み物教材を副読本出版社が転載することが一般的であったことが背景にある<sup>(13)</sup>。今後は、同じ教材であっても、道徳の位置づけが変わっているために授業展開も変えていかねばならない。そこで本稿では、複数の教科書に掲載されている話と、動物愛護に正面から向き合っている話を取り上げて内容紹介と考察を行うことで、多面的な教材研究の一助としたい。

## 1. 「ねこがわらった」/「ねこがわらった時」（2年生対象）<sup>(14)</sup>

この教材は、元の話は同じだが出版社によって表現が異なっているため、内容の比較のために表現をそのまま紹介する。学校図書版は「学版」、廣済堂あかつき版は「あ版」、光文書院版は「光版」と略す。

### （1）内容紹介

主人公のいっちゃん（一ちゃん）が算数の答案を返却されたところ、一つだけ○ではなかった。

「学版」：「一つだけまちがっていて、三角が

いていました」

「あ版」：「一つだけ 三角が ついて いました」

「光版」：「一つだけ まちがって、三かくがついて いました」

それをお母さんや妹に見せるのがいやだったので、三角を丸に直そうとした。

「学版」：「けしゴムでけそうとした」

「あ版」：「赤えんぴつを とり上げて、三角を丸に 直そうとしかけた」

「光版」：「けしゴムで 三かくを けしはじめました」

「コトリという音」がし、いっちゃんがおどろいてふりむくと、ねこのたまがやってきた。いっちゃんには、たまが、青いような光った目で答案を見ているような気がした。たまの白いひげと口のあたりがびくびくとうごいたように見えたので、いっちゃんは三角を丸に直さなかった。

「学版」：「いっちゃんは、きみがわるくなりました。いっちゃんは、きゆうに、自分が、今やりかけていることが、はずかしくなりました」

「あ版」：「一ちゃんは、きゆうに 自分が はずかしく なって、もう 三角を 丸に 直すことが できなく なりました」

「光版」：「一ちゃんは きみわるく になりました。そして いま やりかけて いることを かんがえると、いやあな きもちに なりました」

### （2）考察

この話では、ネコの青く光ったような目が悪いことを見透かしている象徴として使われているだけである。それでもなぜここで取り上げるのかということ、今後も教材として取り上げられる可能性が高いがゆえに、これまでとは異なった授業展開が求められるということと、視線を通してネコに対する理解を深めるためである。

この教材は、本文に入る前に、「学版」では「正直な心」、「あ版」では「ごまかしを しなないで のびのびと」、「光版」では「すなおな ころで」との文言が置かれている。「正直な心」を持つこと、「ごまかしを しなない」こと、「すなおな ころで」で

あれ、というメッセージから期待されるものごとの方向性が明らかな教材である。さらに「**光版**」では話の後に「一ちゃんの『いやあな きもち』はどうしたら なくなるのか、学んだ ことを まとめましょう。」「じぶんが うそや ごまかしを しない ために、こころがけたいことを まとめましょう。」とあるので、うそやごまかしをすると嫌な気持ちになるからしないようにするというのが正答であることが伝わる作りになっている。そのような中で、子どもたちの多様な意見を引き出して議論させるにはどうすればよいのだろうか。

その工夫を、インターネット上の指導案に探してみると、「正直に行動できた経験について交流」させる<sup>(15)</sup>、「学校で忘れ物をしたり、失敗をしたりした時のことを考える」などの工夫がされていた<sup>(16)</sup>。さらに経験を交流させることを通して、子どもたちの関係づくりを意識的に行っている報告もみられた<sup>(17)</sup>。

インターネット上の指導案には、ネコそのものに關してふれられている指導案は見つからなかった。この話においてネコは、単なるきっかけとして扱われているにすぎない存在である。しかし道徳では、動物に対しても理解を深めるような教材も掲載されており、この教材のように、ネコを怖いとか良くないことを想起させる存在として描くことで子どもにマイナスイメージを持たせるような書き方をすることは問題だと考えられる。さらに問題だと考えられることは、ネコの視線に人間と同様の意味合いを持たせている点である。ネコの視線は、動くものや音を発するものに向けられるというだけであり、例えばノートに計算の結果を書き込んでいる鉛筆の音がしていても、ネコの視線はそこに向かう。ネコにとって音は音であり、自分にとって危険かそうでないかを判断するだけだと思われる。教材で表わされるような価値を持たせているのは人間側である。したがってこの教材はネコの習性は理解できないし、うしろめたいことをするとネコが見つけるというような間違ったことを学んでしまうかもしれない。

また、ネコは視線を使って独自のコミュニケーションを取ることが知られており、ネコにとって凝視するということが敵意を表すことである<sup>(18)</sup>。この話からはそのようなネコの習性は学べない。学校で扱うのだからネコに対する誤解を生むような扱いはしてほしくないと思う。この教材の主題は、ネコ

の視線に意味があるように見える子どもの心であろう。ネコの視線をきっかけとするにせよ、自分で考えて良くないと思うことはやらないという自律性を育ててほしい。

## 2. 「目の見えない犬」／「**ダン**」をどうする?」(3年生 & 6年生対象)

この話は、子どもに学ばせる内容の違いにより、学研教育みらい(以下「**み版**」)と日本文教出版(以下「**日版**」)とで抜粋部分が違っている。「**み版**」は子犬を拾うところからで、「**日版**」は飼うための試行錯誤の部分が中心となっている。

### (1) - i 内容紹介・**み版**

のぞみちゃんと私が、ダンボール箱に入って川を流されてきた白い子犬を拾った。その子犬は目が見えない子犬だった。

子犬を団地まで連れてきて、お母さんや友だちに飼ってくれるよう頼んだが引き取り手が見つからなかった。そこで団地の自治会長の坂本さんに相談した。坂本さんも、電話をしたり掲示板に貼り紙をしたりして「知り合いで犬がかえる家がないか、見つからなければ、団地の中で犬を飼って良いか」と団地の人々に呼びかけた。返事は反対が多かった。話を聞いていたお母さんは「あなたたちのおかげで、みんなにめいわくをかけているのよ」と怒っていた。

子犬は一週間ほどダンボールの中ですごした。話を聞いた子どもたちが交代で世話をした。それを見た坂本さんは、もう一度子どもたちのねがいを聞いてもらえないかとみんなに提案し、「子どもたちが今のように世話できるなら」と団地の空き地で飼うことが決まった。

団地の犬だから「**だん**」と名づけた。「**だん**、行ってきます」との子どもたちの声に、**だん**は見えない目で毎日見送っている。

### (1) - ii 内容紹介・**日版**

松山市内の団地で役員たちが相談しているのは、2人の幼稚園児が拾ってきた目の見えない子犬を団地で飼えるように規則を改正するかどうかについて。子どもたちは子犬を団地内の公園の遊具のかけ

でこっそり飼っているようだ。困った自治会長の坂本さんは、役員たちに直接子どもたちの話を聞いてもらうことにした。

子犬を拾った5歳の希ちゃんと何人かの子どもが説明しに来た。はじめは反対していた母親たちも、子どもの熱意に負けたようで子どもの後ろにつきそってきた。

「目の見えない人は、もうどう犬に助けてもらうのに、目の見えない犬はどうして捨てられちゃうんですか…。」希ちゃんがそう言うつむくと、しばらくの間、室内が静かになりました。

坂本さんが静かに口を開き、「希ちゃんの言葉に、われわれはどう答えたらよいのでしょうか」と役員たちに問いかけた。すると一人の役員が以下のように言った。

「犬のにおいがきらいな人や、ほえる声がこわい人もいるんだよ。だから、みんなが気持ちよく生活するために、飼ってはいけないというきまりを作ったんだ。」

それを聞くと、子どもたちは困ったように六年生のまわりに集まって相談を始めました。

6年生の男の子が、子どもたちが団地の一番奥のみんなの目につかないところで囲いを作ること、おしっこやふんの掃除、体を洗うこと子どもたちがすること、ご飯は持ちよることを役員に伝え「お願いします。私たちにダンのお世話をさせてください」というと「お願いします」と子どもたちが一斉に頭を下げた。

翌日、自治会が再び開かれた。子どもたちはなぜ団地の規則があるのかをわかったうえで提案をしてきているのだから「今度は我々が子どもたちに伝える番」と、子どもたちの言う条件をつけることで規則の一部を変えることを住民全員に相談してやることになった。

それから三日後、「ダンを飼うことを許可する」というお知らせが団地の掲示板に貼り出された。

## （2）考察

これは実話でウィキペディアでも「ダン（犬）」という項目が立てられている<sup>(19)</sup>。実話をもとにした教材のためだからか、この話の内容もしっかりと述べられている。3年生対象の「み版」の内容は、捨て犬の命を救うために、犬を飼うことが禁止されている団地のルールを破ってまで世話をし始めた子どもたちの気持ちを大切に、身近な大人（自治会長）が子どもたちを助けている姿が描かれている。これは、子どもたちに対して、困った時にどうすれば良さそうかという一つの道筋を提示しているといえるし、子どもの自主性が伸ばされているといえる。

6年生対象の「日版」では、犬を飼うことが禁止されている団地のルールを見直していく際のやり取りが述べられている。皆で話し合いルールを見直していくことができるというあり方を知ることは、ルールとは何か、どのように作られているのかを知るきっかけにできる内容となっている。そして、両者の教材に共通して言えることは、他人事ではなく自分事ととらえて動く大人や子どもの姿、子どもが考えて行動していることを見守り支える大人の姿が、子どもの権利を尊重した関わりとなっていることである。この話は、子どもの権利条約や日本国憲法などの、人権の学習につなげることができる発展性のある教材といえよう。

しかし別の視点から検討すると、大変問題だと思える部分もみえてくる。それはテーマとのズレである。テーマにイヌを掲げているにもかかわらず、主人公であるダンについては、盲目のためにくるくる回ること、子どもたちの登校を見えない目で見送っていること（3年生教材）、クンクン鳴くだけ（6年生教材）という状態のみの描写で、イヌという生き物を理解することには全くなっていない。この点を逆に考えると、ダンがどのようなイヌなのかを子どもたちが想像できるということになるのだろうか。実際のイヌという生き物を知らないと、ダンについて想像することは難しい気がするが、どうなのだろう。

そのほか、ジェンダーの視点でも気になる表記があった。本文に登場する子ども集団について、性別を記していない部分がほとんどだが、子どもたちの代表として役員に話をするとこでは「六年生の男

の子」、役員にお願いする最初の発声をするところでも「六年生の男の子が言う」と、わざわざ性別が書かれている。これらは、集団の代表には男の子が就くもの、リーダーシップは男の子がとることを期待するというジェンダーバイアスが伝わる記述となっている。指摘されなければ目に留まらないような「自然」な記述の積み重ねが子どもたちの価値観を形成する。教員はジェンダーの存在に敏感であってほしいと思う。

### 3. 「動物たちの命を守る—熊本市動物愛護センターのちょう戦—」(4年生対象)<sup>(20)</sup>

#### (1) 内容紹介

ペットを飼っている多くの家では、ペットを家族の一員としてかわいがり大切にしているが、「かい主の世話が不十分でまよい犬となってしまうたり、事じょうがあつてすてられてしまったりするペットもたくさんいます」。そうした動物たちが、動物愛護センターに運ばれ、「その動物たちの多くは、そこで命をたたれてしまうのです。これを殺しよ分といひます」。

日本での殺処分数は、犬猫だけで年間10万頭以上。「かい主の勝手な事じょうで命をたたれてしまう、つみのない動物たち。そして、つらい気持ちで殺しよ分しなければならぬ動物愛護センターのしよく員さんたち」。この現状を変えるために、熊本市動物愛護センターの職員さんたちが殺処分ゼロを目指して立ち上がった。

熊本市動物愛護センターでは、ペットを連れてきた飼い主に対して「この犬とくらしした日々を思い出してください」、「引き取ってくれる人を真けんにさがしましたか」などと話したり、引き取った犬猫の新しい飼い主を探して引き渡したりなどするようにした。ときには小学校や中学校に向かい、動物とふれ合うことを通して、命の大切さや他人を思いやる気持ちを育むことにも力を入れた。

その結果、熊本市動物愛護センターで殺処分される動物の数は、2013年度は「犬とねこを合わせて十三頭」で、目標であるゼロに近づいてきている。こうした活動が全国の動物愛護センターに広がり、殺処分される動物の数は少しずつ減ってきた。

熊本市動物愛護センターの所長の村上さんは「動

物も、人と同じ大切な命をもっています。ですから、動物をかうということにはせきにんがあります。」「かうからには、きちんと世話をして…命がなくなるまで、しっかりとめんどうをみてもらいたい」と言う。「みなさんは『命』とどう向き合っていますか。」

#### (2) 考察

命を絶たれてしまう動物たちとともに「つらい気持ちで殺しよ分しなければならぬ動物愛護センターのしよく員さんたち」にも言及されており、つらい思いをする人間や動物が減ることは良いことだというメッセージがストレートに伝わってくる教材となっている。一方、動物愛護に関わっている立場からいうと、「殺処分ゼロ」の目標を行政が掲げることについての弊害がある現状も子どもたちにぜひ伝えてほしいと思う。神奈川県動物愛護協会の山田佐代子さんの言葉を借りれば、殺処分ゼロの弊害として、行政が収容した犬猫の殺処分数を減らすために、本来自分たちがやるべき業務を動物愛護団体に丸投げしているように見えるとのこと。引き取り相談がくると行政は、詳しい状況も聞かずに相談者に動物愛護団体の連絡先を伝えることが多々あるとのことで、昨年度、神奈川県動物愛護協会にかかってきた相談電話は前年度比約200件増え約3000件に達したという<sup>(21)</sup>。

現実には、命をつなぐことはお金や労力がかかる。単純に、動物の命を救って良かったね、だけではなく、命をつなぐためのお金と労力を誰が払うことになるのか、子どもという立場で何ができるのかまで想像できる子を育ててほしい。この教材は、「かうからには、きちんと世話をして…命がなくなるまで、しっかりとめんどうをみて」という発言をうけて、「みなさんは、『命』とどう向き合っていますか」という発言で締めくくられている。この教材の流れで子どもたちに話し合いをさせても、ペットのいる家庭の子どもならば、自分の家のペットの世話をしているかどうか、という視点で意見が出せそうだけれども、ペットを飼っていない、飼ったことがない子には、命とどう向き合っているかについて考えさせるのは難しいだろう。

掲載写真についても問題がある。この教材では写真が4点使われており、「動物愛護センターで犬の

しつけをするしよく員さん」、「引き取られる犬と新しいかい主との出会い」、「新しいかい主と出会う記念写真」、「ふれあいほう問教室で心ぞうの音をきく小学生」とあるが、これら全部の写真に掲載されているのは犬のみ。教材の本文では、ペットとして「犬とねこ」「犬やねこ」などと表記しており、殺処分ゼロの対象としてはイヌだけでなくネコも入っている、ネコや他のペットの写真を使うべきといえる。

教材でどのような写真を使っているのかということ、子どもにとってかくれたカリキュラムになる。かくれたカリキュラムとは、物事の見かたや知識など、教える側が意識しないまま子どもたちに伝えているメッセージのこと。この教材では、本文で「犬とねこ」としながら写真にイヌしか掲載していないので、イヌとネコを見たらまずイヌに目を向けさせる、などの行動を身につけさせることにつながる。また、タイトルに「動物」と掲げて本文では「ペット」と言っているけれども、それらは主にイヌを指すもの、と無意識に思っていく可能性もある。教材は繰り返し読まれるため、子どもたちにとっては考え方や見方のレッスンをしているようなものである。タイトルに掲げられているように、イヌのありようを通して多くの動物たちの命を守っていくために、どのようなことが実際に行われ、それらをふまえて何ができそうか、を考えられる子どもたちを育ててほしい。

#### 4. 「命の重さはみな同じ」（4年生対象）

##### （1）内容紹介

動物保護施設「ハッピーハウス」の玄関わきに、段ボール箱が置き去りにしてあった。中に入っていたのは、大けがをしてすっかり弱ってしまっている子犬。ハッピーハウス代表の甲斐さんがけがの程度を調べると、左前足が完全に折れ体力がかなり弱っていた。

かなりひどいけがです。治りようするには、たくさんのお金がかかりそうです。飼い主のいない犬では、だれもはらえません。こういう場合、たいていの施設や運びこんだ動物病院では、安楽死\*させるようです。

\* [安楽死] 病気やけがなどで治る見こみがない場合、薬などで苦しませずに死なせること

生きるものの命の重さは人間も動物もみな同じといつも思う甲斐さんは、その犬を動物病院に運んだ。その犬は足を全部骨折していることがわかり、命を救うには左前脚を切断しなければならないという。診察した獣医は安楽死をすすめたが、甲斐さんは「生きてさえいたら…きっと楽しいことがあるにちがいません。」「なんとか、命をつないでやってください」と頼み、その熱意に打たれた獣医は長い時間をかけて手術してくれた。手術は成功したが、回復までかなりの時間がかかった。ひどい目にあったのに、人に対して吠えたりうなったりせず、人なつっこくてかわいい子犬で、ラブと名づけられた。

そんなある日、ラブの様子をたずねて来た人がいた。ラブが手術を受けた動物病院で、ちょうど同じ頃、愛犬の診察を受けていた夫婦だった。大手術をしたラブのことが気になり、その後、何度も尋ねてきてはラブの様子を見守っていた。あの時一緒に診察を受けていた愛犬は死んでしまったということだった。そんな二人が、ラブの引き取りを申し出た。驚いた甲斐さんが理由を尋ねた。

「どんな状態でも、生きていこうとするラブの姿に感動したからです。わたしたちはスタッフのみなさんの献身的なすがたから、命の重さはみな同じだという想いを感じたからです。」

生きていてよかったね。そして、いい飼い主さんにめぐり会えて、ほんとうによかったね、ラブちゃん。

##### （2）考察

この話は、命をつなぐためにはお金がかかるということ、またそれだけでなく大変な労力がかかることも伝わる内容になっている。この点、大変現実的な記述になっていると考えられる。また、現実的な記述として「安楽死」の説明がある。人間の都合で動物の命を奪うこと、すなわち人間の都合で動物を殺すこと、という意味合いが読み取れる表現となっている。

しかし展開を追っていくと、いくら道徳教材とは

いえ、あまりにもラッキーなことばかりが積み重なった内容となっており、この点是非現実的だといえよう。どのような点からそういえるのかについて、段階的に上げていくと

- ア) 瀕死の重傷状態から手術を受けることができた（安楽死をすすめられたにもかかわらず）、
  - イ) 手術を受けて命が救われた（手術が成功しないこともある）、
  - ウ) 性格の良い子犬である（人間からひどい目にあつたら扱いにくい性質になることが予想されるが、ラブの場合は人から好かれる性質をもっていた）、
  - エ) 保護施設のスタッフたちに愛情を受けて育てられた（スタッフの世話の手が足りない場合、どうしても愛情不足となりがち）、
  - オ) 心配をしてくれる第三者がいて、引き取りを申し出てくれた（引き取られない場合も多い）
- と、少なくとも5段階のラッキーが重なっている。

この話は、ラッキーが重なって命が救われてよかったね、で終わらせることはできず、本文の後には、「今まで『命の重さはみな同じ』と感じたり、考えたりしたことがありますか。それはどんなことですか」と書かれている。ここでの「みな」とは、何を指しているのだろうか。人間と他の生き物のことだった場合、想定される生き物はどこまでだろうか。その範囲によっては、人間と他の生き物の命を同じと言えないかもしれないだろう。また、「命の重さ」を感じたり考えたりしたことがあることが前提となっている設問だと思われるが、生き物を飼ったり、触れたことがない子どももいるだろう。その場合は、写真絵本や映像を見せるなどして、「みな」の指す具体的な生き物を限定させれば、考えやすいかもしれない。

## 5. 「かがやけ いのち—小さな いのちのものがたり—」（1年生対象）

### （1）内容紹介

ある日、傷だらけで、後ろ足の先が切れて無くなっていった犬の赤ちゃんが捨てられていた。見つけた人が警察に届け出たが、何日たっても飼い主が見つからない。子犬は、動物愛護センターに移され

た。そこにまりこさんがやってきた。

まりこさんは、すてられた犬をひきとってあたらしいかいぬしを見つけるおてつだいをしています。

子犬は、「みらい」というなまえをつけてもらいました。「みらいはけがで足の先がないから、げんきにはしることはできないかもしれないね。あたらしいかいぬしは見つかるかしら…。」

ある日、みらいを引き取りたいという人から連絡があり、千葉県九十九里浜というところで暮らすことになった。

みらいは海岸を散歩したり、砂の上を元気に走り回ったりしている。近くの子どもたちとも仲良しだという。「みらいの小さないのちは、いまかがやいています。」

### （2）考察

この話は『命のバトンタッチ 障がいを負った犬・未来』（今西乃子 作・山本祥子 絵）の要約である。1年生向けにかなり短い文章にしたことは納得できるのだが、その要約の仕方が今一つである。なぜならば「まりこさん」の登場部分を全部カットしても問題のない文章だからである。この要約の仕方では、なぜまりこさんを登場させる必要があるのかわからない。またもう一点、教科書の記述では子犬の名前を誰がつけたのかわからない。まりこさんなのか、愛護センターのスタッフなど別の人なのか。前後の文章の主語は「まりこさん」なので、もし名づけ親がまりこさんならば、「まりこさんは子犬に「みらい」というなまえをつけた」とすると、文章上は分かりやすいと思われる。しかし、制限字数を考慮すると、名付け親が誰かよりも子犬がどうしてみらいという名前になったのかを書き込む方が大事かもしれない。元の本のタイトルにある『命のバトンタッチ』という意味合いが込められていそうな気がするからである。

そのような要約の分かりにくさはあるものの、この話は、みらいと小学生の子どもたちが仲良しなことが描かれており、1年生にとっては、みらいとい

うイヌを身近な存在として感じる点が良い部分と言える。また、後ろ足の先が切れていても（＝障害がある状態）、地面が柔らかければ走り回ることができるイヌの姿から、障害があっても、生活する環境を整えれば生活する上で支障とはならないということが理解できる点も良い教材といえよう。

ではもともとの話がどのようなものなのか、『命のバトンタッチ 障がいを負った犬・未来』の解説<sup>(22)</sup>から内容を紹介する。

両足を切断され、目の下を切られ、重傷を負った一頭の子犬が、千葉県富里市にある動物愛護センターに収容されているのを、里親探しボランティアをしている、山口麻里子さんという一人の女性により、明日には殺処分されることが決まっていた小さな命が、まさに死の淵から救い出され、さまざまな苦難をのりこえ、ハンディをもっていることを十分承知の上で引きとった新たな飼い主のもとで、幸せな生涯をおくることになったという物語

ここから、まりこさんがいなくては子犬の命が救われなかったことがわかる。教科書の要約でもその点がわかるとよかったと思う。

さて本文を読むと、イヌにみらいという名前をつけたのはまりこさんであり、まさにタイトルに沿った命のバトンタッチの状況が描かれていた。以下、殺処分前日にまりこさんによってセンターから引き取られた子犬のリアルな状況を紹介する。

- ・「子犬の体はひどい悪臭をはなち、耳のわきにはダニがびっしりとついていた。」
- ・「右目はざっくりと切られ、つぶれている。もう見えないだろう…。そして、右足は足首から下が切断…。」
- ・「右うしろ足だけが切断されたと思われていた子犬の足は、左足も指がすべてなくなっていた。」  
そして、命を救うことに関しての迷いも細かに描写されていた。
- ・「普段が楽天的で前向きな考え方ができる麻里子だったが、この時ばかりは絶望の淵に追いやられた気分だった。右目、右足だけでもさんざん悩んだのに、うしろ足が両方なければ、里親を見つけ

るのは不可能だ…。」

- ・「今、自分がこの子を戻せば、この子は明日、あのステンレス製の箱に入れられて、確実に殺されてしまう。何のために創り出された命なんだろうー。」

イヌの名前についても、なぜ「みらい」なのかがかか分かる描写がなされていた。

- ・『『未来ちゃん…』麻里子は子犬に向かって小さな声で言った。…『このセンターにいたあの子たちの分まで誰よりも頑張って生きるんだよ…。』』
- ・「センターで一緒に収容されていた子たちの未来を、この子が精いっぱい受けついでくれますように…。ほんとうはどの子も引きだし、つれて帰りたいかった。しかし、そこには限界がある。自分には無理だ。その無力さに麻里子は胸がしめつけられた。」

これらの内容から、まりこさんはまさにキーパーソンであることがうかがえる。教科書ではその点が不明確であるし要約も不十分ではあるが、道徳教材としては発展性があると考えられる。みらいに関する書籍が数冊出ており<sup>(23)</sup> 子どもの発達段階に応じた参考文献の提示がしやすく、命を救うということについて多面的に学習できると思われるからである。そのほか、今西さんによるイヌやネコに関する本も複数出版されている<sup>(24)</sup>。子ども自身がイヌに関する発展的学習をしていくことが可能であり、また教員自身が教科書の内容を超えてさらに子どもたちに学ばせたいことを提示しやすい。

教科書には、教材をもとにした活動が書かれているが、それらに関して気になったことに話題を転じる。

一つ目は、「おはなしで かんがえた ことをもとに、じぶんを みつめましょう」という活動として、「じぶんや、どうぶつの ことで、『かがやいて いるな』と おもった ときの ことを、はなしあって みましょう」と書かれていることである。1年生に対して「かがやく」との表現を用いてもその意味することが伝わるのだろうか。それとも1年生だからこそ、複雑な余計なことを考えずに話し合いができるのだろうか。

二つ目は「私がかがやくのは どんな ときでしょう」との説明文とともに掲載されている8つの



イラストについて。その8つとは、起床時の女の子、食事している女の子、授業中に手を挙げている女の子、運動会で転んだ女の子、本を読んでいる女の子、転んで痛がっている女の子に「だいじょうぶ?」と声をかけている女の子、鬼ごっこしている3人の女の子、家の中でエプロンをつけたお母さんのお手伝いをしているお父さんと女の子、である。ジェンダーの視点で見ると①走ったり転んだりというイラスト3点が全部女の子、②エプロンをつけているのは母親。父親は女の子とともに手伝い。手伝う子どもは女の子のみ、③女の子の髪の毛が長く、男の子の髪の毛は短い、④一見して性別が分からない子が書かれていない、の4点が気になる。イラストからは、活発なのは男の子、家事責任を負っているのは母親と女の子、女の子の髪の毛は長いものという、古いジェンダー観がうかがえる。現在、一クラスに2~3人はいるとされる、多様な性を持つ子どもへの配慮が感じられない。目の前にいる子どもたちのありのままを受け止めることができるよう、教員はジェンダーの存在に敏感であってほしいと思う。

## 6. 「ポロといっしょ」(4年生対象)<sup>(25)</sup>

### (1) 内容紹介

ほくの住んでいる町が大きな地震に襲われたので、お父さんとお母さんとほくと3歳の柴犬のポロと一緒に小学校に避難しました。人は体育館、ポロは校庭が避難所となっています。ほくは、慣れないところでポロのことが心配でした。

ポロはほくについてきたようにキュンキュン鳴いた。でも、みんなががまん、こんなときは。

ひなん所でくらすうち、ほくにはもう一つ心配がふえた。ほくたちのとなりの場所でねおきしているおばあちゃんのことだ。ぜんぜん知らない人だったけど、となりにいればやっぱり気になる。

最初の晩、おばあちゃんは配られたパンなどを食べませんでした。次の日もおばあちゃんは食べようとしません。口をつけたら捨てるしかないからもったいない、と言います。そこでほくが「だいじょう

ぶ。…のこりが出たら、ポロはおよろこびさ。」と言ったところ、おばあちゃんは少しだけ食べ、「ワンちゃんにあげてちょうだい。」と、残りをほくにわたしてくれました。

それから、おばあちゃんは少しずつ食べ物を口にするようになりました。残りは「ポロにあげて。」と、いつもほくにくれました。でも、おばあちゃんは横になったままです。周りの人が、動かないと体に悪いからと運動を勧めても、おばあちゃんはじっとしていました。

「おばあちゃん、ポロがおばあちゃんに会いたいです。」

おばあちゃんがお昼ごはんののこりをわたしてくれたとき、ほくは言ってみました。

「ポロがお礼を言いたいんだってさ。いつも食べ物をもらっているお礼。会いに行っておげよ。」

ほくが手を引っぱると、おばあちゃんは、つられるようにしてゆっくり立ち上がった。

ふたりで校庭に向かうと、ポロがほくのすぐそばを見つけて。わんわんほえた。…おばあちゃんの顔がはじめてほころんだ。

おばあちゃんはごはんののこりを左手にのせてさし出した。ポロは食べ終わると、その手をぺろぺろなめた。おばあちゃんは右手でゆっくりポロの頭をなでていた。そのうち、えがおがゆがんだかと思うと、その目からなみだがもり上がってこぼれた。

ほくはそっとおばあちゃんのそばをはなれた。なんだか、いはいけないような気がしたんだ。

おばあちゃんがポロに会ったその日の午後、横にならなかった。夕食後には、おばあちゃんから「ポロにごはんをやりに行こうかね」と、ほくにさそいがあった。…明日のポロの散歩は、おばあちゃんもさそおうと思った。

### (2) 考察

ペットと避難することは他人事ではなくなってい

る。ペットが家族の一員とみなされペットと避難することが一般的になりつつある現在、タイムリーな教材といえる。その避難のありようについて、人とペットは同じ場所で寝起きできるわけではないということが、この教材では描かれている。環境省では、災害時にはペットと一緒に同行避難することが基本と位置づけ、同行避難とは、避難所までの同行という意味であり、ペットと人が避難所と同じ建物の中、同じ部屋の中で暮らせるわけではないという定義づけをしている。けれどもこのような理解が日本の中に広がっていない現在<sup>(26)</sup>、この点を子どもに理解させるのに良い教材だと考えられる。

それ以外の点に関しては疑問に思う部分が多々あった。この教材は、「思いやりの心」との位置づけなのだが、誰の誰に対する思いやりの心を持つことを想定しているのだろうか。タイトルに「ポロ」とイヌの名前が掲げられているけれども、イヌに対する思いやりはまったく感じられない内容となっている。ポロの立場に立てば、人間の都合で慣れない場所で飼い主と離れた生活を強いられて、食べ物も人間の残り物を食べさせられている。ポロにとっても非日常な状態だからこそ、できるだけいつもと同じような状態を保つことが飼い主としての務めではないだろうか。環境省が2018年9月13日に発行した「災害、あなたとペットは大丈夫？」<sup>(27)</sup>では、ペットのために「少なくとも5日分〔できれば7日分以上〕のフードと水を備蓄するよう」と書かれている。筆者は犬を飼ったことがないのでよくわからないのだが、昔と違って今は、人間の食べ物をイヌに食べさせることはイヌの健康にとって良くないのではないだろうか。少なくともネコに関しては、人間の食べ物は塩分などが多いため、ネコにとっては良くないと言われている。

そのようなことを考慮すると、この教材のテーマは、ポロと一緒に、避難所の隣人のおばあちゃんの元気を引き出した「はく」の成功談といえる。その意味では心を明るくする展開ということができよう。けれども、道徳のテーマである“命”の視点で読むと別のメッセージが子どもたちに伝わるような気がする。“命”には優先順位があって、人間が中心であり、犬は人間に都合よく扱われる存在なのだ、という…。

このようなメッセージは、動物福祉の観点から見

たら時代に逆行しているといつてよい。動物福祉とは、一言でいえば、「動物が精神的・肉体的に充分健康で、幸福であり、環境とも調和していること」<sup>(28)</sup>である。その考え方は近年さらに進化しつつあり、「ワン・ウェルフェア」との言葉で、健康、生活の質、心身の幸福感は人と動物を分けては考えられない、となってきた<sup>(29)</sup>。動物に優しい世界は人間にも優しい、すなわち動物と人の福祉は一つという考え方である<sup>(30)</sup>。

非日常下で、どうすればワン・ウェルフェアを追求できそうか、そのためには何が必要なのか、子どもたちも一緒にぜひ考えてほしいと思う。

## まとめ

### (1)

本稿では小学生用の道徳教科書の中からイヌネコを扱った教材を取り上げ、動物愛護の視点とジェンダーの視点からも検討した。

その結果、①タイトルに「ねこ」「ダン」「犬」「ポロ」と掲げられていても、イヌネコ理解にはつながらないこと(1. 2. 6)、②タイトルに「命」「いのち」を掲げているものについては、捨てられたり傷つけられたりしている動物を扱って現状の一端を伝えてはいるが、非現実的な目標である「殺処分ゼロ」や非現実的な幸運が積み重なって命が救われたことを取り上げており(3. 4. 5)、一般化して考えていくことが難しいことが明らかとなった。殺処分や虐待については、人間の持つ身勝手な側面を提示することになるため、場合によってはイヌやネコを傷つけても良いのだと思われる可能性もある。それだけに、授業を担当する教員の力量が問われる内容といえる。

またジェンダーの視点からは、①リーダーを務めるのは男の子、お手伝いする女の子などの性別役割分業が見られたこと、②子どもの性別を男女のどちらかはっきりわかるように描いており性的少数者への配慮が見られないこと、がうかがえた。ジェンダーに敏感であることが子どもの姿をありのまま受け止める第一歩と言われて久しいが、ジェンダーバイアスの残る教材がさりげなく登場しており、この点を見抜いていくことも教員の力量が問われるといえよう。

## (2)

もともと「特別の教科 道徳」という教科自体の存在が矛盾だらけで心を育てることに教科書や評価があるため、一定の方向性に向かって育てられる危険性が大きい<sup>(31)</sup>。様々に指摘されている矛盾や欠点を少しでもより良い方向に解消したり解釈したりして子どもの力を伸ばしていくには、教材を多面的に理解し、授業では子どものいろいろな方向性のある発想を大事に取り上げていくことが必要である。そのために、教員同士の自主的なつながりのもとに情報交換を行っていくことが求められる。これまで筆者が参加した教員の研究会や集会などで、道徳をどのように考え、問題のある教材をどのように扱っていけばよいのか、具体的な方策が情報交換されていたので、ここに紹介することでまとめとしたい。

- ・時間数の関係で全部の教材は学習できない。今ある中で、できるだけ良い教材を取り上げる。
- ・話の後半を隠し、途中まで読ませて話し合いをさせる。
- ・最初の文章だけ読み、その話の続きを子どもたちに考えさせる。
- ・子どもたちに、教材の中から一つだけ楽しいことを見つけさせる。その点をもとに授業を展開していく。
- ・子どもの読み方でどのように授業が展開していくか分からない国語の時間が1時間増えたと捉えていく。

## 注

- (1) 拙稿「動物愛護を通じた社会づくりに関する考察—『自然と動物を考える市民会議』会報分析を通して—」『人間研究』51号、「NPO法人「自然と動物を考える市民会議」の思想と組織」『人間研究』52号、参照。
- (2) 永田繁雄ほか29名『みんなのどうとく3年』学研教育みらい 2017年
- (3) 大原龍一・松尾直博ほか21名『かがやけみらい しょうがっこうどうとく1年 よみもの』学校図書 2017年
- (4) 大原龍一・松尾直博ほか21名『かがやけみらい 小学校どうとく2年 よみもの』学校図書 2017年
- (5) 林泰成・貝塚茂樹・柳沼良太ほか24名『小学どうとく はばたこう明日へ4』教育出版 2017年
- (6) 横山利弘、七條正典、柴原弘志ほか16名『みんなで考え、話し合う 小学生のどうとく2』廣成堂あかつき 2017年
- (7) 加藤宣行監修・新宮弘識・上杉賢士ほか21名『しょうがっこうどうとく ゆたかなこころ1ねん』光文書院 2017年
- (8) 加藤宣行監修・新宮弘識・上杉賢士ほか21名『小学どうとく ゆたかなこころ2ねん』光文書院 2017年
- (9) 渡邊満・押谷由夫ほか44名『新しいどうとく4』東京書籍 2017年
- (10) 渡邊満・押谷由夫ほか44名『新しい道徳6』東京書籍 2017年
- (11) 藤永芳純・島恒生ほか30名『小学道徳 生きる力6』日本文教出版 2017年
- (12) 朝倉諭美子・杉中康平・田沼茂紀ほか14名『どうとく4 きみがいちばんひかるとき』光村図書 2017年
- (13) 高橋陽一「<特集 道徳教育と仏教教育> 特別の教科である道徳と宗教教育の動向」(日本仏教教育学会『日本仏教教育学研究』26 2018年3月) 参照。
- (14) 本節の内容は、NPO法人自然と動物を考える市民会議の会報『どうぶつ会議』112号(2019 Winter)のp.4-5でも紹介した。
- (15) 道徳学習指導案・松川清  
[www.ita.ed.jp/edu/tokiwes/H28kenkyuushidouan2nen.pdf](http://www.ita.ed.jp/edu/tokiwes/H28kenkyuushidouan2nen.pdf)
- (16) 高山市小中学校教育実践資料(小学校)・片野晶子  
[ga/taka-boe/pdfjdataes/16-s2-doutoku-sidou-minami1.PDF](http://ga/taka-boe/pdfjdataes/16-s2-doutoku-sidou-minami1.PDF)
- (17) △を○に直したら「それはいけない」と誰もが答える。でもこれだけでは道徳の授業にならないので、なぜそう考えるのか自分の経験に基づいて、意見を述べた。「道徳の証拠は自分の経験の中から見つかるんだよ」と子どもたちに声をかけた。すると子どもたちはいろんなことを話してくれた。「ここだけの話だから…」と非公開と

すると、何ともいろんな愉快な話が出てきた。みんないろんなことをしているのである。そして叱られたりしていることがわかり、そのたびに大笑いが起きた。でもこうやって「この仲間なら何でも話せる」というのは、とっても大事なことなのではないかと思う。

〔4 学年 道徳授業案〕 授業者 森竹高裕

<http://sirius.la.coocan.jp/doutoku/neko.pdf>

- (18) 『ねこのきもち』 vol.136 (2016 年 8 月 ベネッセ p.23) では、「猫は視線を使って、独自のコミュニケーションを取る」、「他者と目を合わせるのは大体、ケンカするとき。相手の出方をじっと観察します」と説明されている。そして、ベテラン飼い主である「海苔子ばーちゃん」というキャラクターに「猫と人では、目づかいの方法が違うということ、きちんと知っておく必要があるんじゃないよ」と語らせている。一方で飼い猫に限ると、視線の持つ意味が変化してきているという。『「本来の猫」とのギャップがすごい 飼い猫の真実』（『ねこのきもち』vol.156 2018 年 5 月 ベネッセ、p.16-29) の中では、目線について「目が合うと…イマドキは見つめる♡ 本来はすぐさまそらす」とされている。「飼い猫は、飼い主さんをじっと見つめ返すことがあります。これは飼い主さんが願いをかなえてくれるとわかっているから。たとえば、食事が用意されたり、なでてもらえたり、呼びかけてもらえたり。これらが嬉しくて覚え、繰り返すのでしょ」とのこと。哺乳動物学者の今泉忠明氏によれば「その行動は、人との暮らしの中でできるようになったもの」、「猫は自身が生きていけるよう環境に順応する能力が高い動物。人との暮らしが長くなるほど、より可愛がられる術を身につけている」という。
- (19) wikipedia ではダンの生涯について以下のような記述がなされている (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ダン> 2018 年 10 月 21 日最終閲覧)。

生涯

1993 年（平成 5 年）夏、吉藤団地に住む幼馴染みの石井希と久保田望（共に当時 5 歳）が、団地近くに捨てられている盲目の子犬を見つけた。団地はペット飼育禁止だったが、

2 人は犬を放ってはおけず、同団地の小学生たちと協力し、秘かに団地の隅で飼い始めた。しかし子供たちだけでの飼育、まして盲目の犬の世話には限界があった。希たちと親しい同団地の自治会長・坂本義一が協力し、彼の再三にわたる説得、盲目の犬を救おうとする子供たちの真剣な声を受け、団地の住人たちもその犬を団地で飼うことに同意。坂本が一時的に犬を預かる保証人になり、団地の所有者でもある松山市からも飼育の許可が下りた。犬は、団地で飼うことから「ダン」と名付けられ、子供たち一同が飼い主となって団地で暮し始めた。

ダンの飼育から 3 年後、坂本の知人でもある「愛媛子ども文化研究会」代表者の薦めで、当時小学校 2 年生となっていた希と望が合作で紙芝居『目の見えない犬』を製作。これが紙芝居コンクールの子ども部門で最優秀賞を受賞し、大きな反響を呼んだ。

数年後に望が家の転居で団地を去り、希も学業のためにダンの世話が困難になったが、ダンは坂本が飼い主となり、希たちの後輩ともいえる地元の子供たちや、団地の住人たちの協力のもとで団地で暮らし続けた。2006 年（平成 18 年）11 月 15 日、年齢 13 歳で死亡。

- (20) 本節の内容は『どうぶつ会議』110 号（2018 APRIL）の p.12-13 でも紹介した。
- (21) 「増える飼育放棄 行政の「殺処分ゼロ」で愛護団体にしよせ」  
<https://sippolife.jp/article/2017122200002.html>  
(sippo 朝日新聞社 2018 年 1 月 3 日 14:30 配信)
- (22) 社団法人神戸市獣医師会前会長 旗谷昌彦「解説 すてた命に対する責任」（今西乃子・山本祥子絵『命のバトンタッチ 障がいを負った犬・未来』岩崎書店 2006 年 p.139）
- (23) 筆者は今西乃子著作の以下の 10 冊を確認した。

- ・『しあわせのバトンタッチ—障がいを負った犬・未来、学校へ行く』（2009 年。のち岩崎書店フォア文庫、2014 年）
- ・『捨て犬・未来と子犬のマーチ—もう、安心していいんだよ—』岩崎書店 2011 年

- ・『東日本大震災・犬たちが避難した学校 捨て犬・未来 命のメッセージ』岩崎書店 2012年
  - ・『捨て犬未来に教わった27の大切なこと一人が忘れかけていた信じること、生きること、愛すること』青春出版社 2013年
  - ・『捨て犬・みらいと捨てネコ・未来』岩崎書店 2014年
  - ・『捨て犬・未来、命の約束—和牛牧場をたずねて—』岩崎書店 2014年
  - ・『捨て犬・未来と子犬のマーチ』岩崎書店フォア文庫 2014年
  - ・『子犬のきららと捨て犬・未来—まああるい、まああるい、ふたつのシッポー』岩崎書店 2015年
  - ・『捨て犬・未来、天国へのメッセージ』岩崎書店 2016年
  - ・『かがやけいのち!みらいちゃん』岩崎書店 2018年
- (24) 筆者は、今西乃子が著作者で浜田一男が写真撮影との以下の13冊を確認した。
- ・『犬に本を読んであげたことある?』講談社 2006年
  - ・『犬たちをおくる日』金の星社 2009年
  - ・『読書介助犬オリビア』講談社 2009年
  - ・『ゆるるシッポの子犬・きらら』岩崎書店 2012年
  - ・『おかあさんのそばがすき 犬が教えてくれた大切なこと』金の星社 2013年
  - ・『犬のハナコのおいしゃさん』WAVE出版 2013年
  - ・『しあわせになった捨てねこ』講談社 2014年
  - ・『よみがえれアイボ ロボット犬の命をつなげ』金の星社 2016年
  - ・『捨て犬その命の行方 救われたがけっぷち犬のその後の物語』学研教育出版 2015年
  - ・『命を救われた捨て犬夢之丞 災害救助泥まみれの一步』金の星社 2015年
  - ・『犬たちをおくる日 この命、灰になるために生まれてきたんじゃない』金の星社 2015年
  - ・今西乃子著/浜田一男写真『ねだんのつかな
- い子犬きららのいのち』岩崎書店 2017年
  - ・『ピースワンコ物語—犬と人が幸せに暮らす未来へ—』合同出版 2017年
- (25) 本節の内容は『どうぶつ会議』111号(2018 AUTUMN)のp.10-11でも紹介した。
- (26) 2017年11月23日、信州大学工学部SASTec信州科学技術総合振興センターにて開催されたシンポジウム、「災害—その時間われる動物との絆—見えない課題が見えてくる—」報告参照(『どうぶつ会議』109号、2018 WINTER、p.2-4)。『どうぶつ会議』110号(p.5)では、環境省が2018年2月に改訂した「人とペットの災害対策ガイドライン」の要点を紹介している。また、ペットとの同行避難の実態については、2018年の西日本豪雨の際、ペットを飼う被災者が避難所での受け入れを断られたり、自粛したりする「ペット連れ難民」の問題が浮上していることが報道された。実際の運営も各避難所任せで、対応にばらつきがあったという(「ペット連れ被災者 苦悩—避難所に拒否され車中泊—」『読売新聞』2018年7月18日夕刊〈11面〉)。
- (27) 環境省「災害、あなたとペットは大丈夫?人とペットの災害対策ガイドライン〈一般飼い主編〉」([http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2\\_data/pamph/h3009a.html](http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h3009a.html))
- (28) 「公益社団法人 日本動物福祉協会」HP (<http://www.jaws.or.jp/>) 参照。
- (29) 連載コラム「動物愛護の現状—ワン・ウェルフェアとは何か—」(<https://www.dokyoren.com/>) 参照。
- (30) 『どうぶつ会議』110号掲載「シンポジウム報告 国際基準の動物福祉を考える」参照。
- (31) 例えば、雑誌『世界』2018年11月号(岩崎書店)で「〈道徳化〉する学校」の特集を組んでいる。

